

「富士の道の記」について

On “Fuji-no-michinoki”

板 坂 耀 子

Yoko Itasaka

(国際共生教育講座)

(平成十六年九月十日受理)

一 書誌と作者

「富士の道の記」について

「国書総目録」には、この書は収録されていない。富士山関係の紀行と題名その他から推測できる紀行はすべて目を通したが、この紀行と内容が同一のものはなかった。したがって、私が見た新潟大学の写本のみが現存する一本である。

このようなことは近世の紀行ではさほど珍しいことではない。また、近世の紀行の中で山岳紀行ともいうべき作品はおよそ一九〇点、富士山に関するものもその中で三十三点ほどはあり(註1)、富士を題材にした紀行が特に珍しいのでもない。それをあえて紹介するのは、この作品が富士山紀行や山岳紀行のみならず近世紀行全体から見ても、非常に内容も表現力も豊かな、すぐれた作品だからである。

その理由は第二章以下で述べるとして、これほどの作品を書いた作者が何者かわからない。深川に住んでいた俳人のようであるが、他の作品

も発見できない。ご教示を乞う次第である。

書誌について、記しておく。

写本一冊。新潟大学佐野文庫所蔵。二四・六×一六・五_cm。茶色表紙に富士山の絵を描く。中央白題箋。外題「道の記 全」。内題「富士の道の記」。九行書、八十六丁。

「天保十四年癸卯年八月 東都深川隠商 松露園礎山覚書」の後書。その後に「梅樹園 夢てふ」の跋文を附す。

二 旅立ちと、のどかな冒頭

冒頭に作者は、富士山に登山する理由について次のように述べている。

十とせあまりのむかし、子なるものゝ病て、こゝの医かしこの医の術つきて、此世のものとおもわざりしが、富士の御山やまへねぎこと（祈願）し、三五の年にあたれる時、御嶺へのぼらん事を誓ぬるに、神も其真心を納ましてや、そく（即）に病の愈し事こそ尊くありがたけれ。さればことし天保の癸卯、其年なるまゝに、ふみ月の十日、旅立ちせんと、

また、後書にも次のようにある。

はじめに書いだせるごとく、ふたつなるみやまへねぎことをちかひ、子なるものはつかへに身のまゝならねば、かわりにもふ（詣）づる我さへ、もはや五十二の老に入、あがきの足のこゝろならず、こぞ（去年）の春よりなす世わたりも、なか／＼にあしをたすける路やうもなし。「年をのべんもこゝろうし。よしやみねへのぼらずとも、やくせし神の麓なるあさまのみにゆるされてかへらばや」と思ひつゝ、あるくまに／＼書つゝる、ゑき（駅）やみち（道）から山里なり川のなりまで、そここゝと日なみに（日にちの順序に）とむれど（書きとめたが）一日に十里にあまる老そく（足）の、神のめぐみや、すこやかにて思わぬ頂上ありがたく、其みしまゝのたらわぬはし／＼、くるへるうた（狂歌）は七十五首、言葉心もとゞかねど、口から出たまゝ四十六句に脇一句、すべては百廿、「其年（百二十歳）までもながらへて、またみやまへまふで（詣）ん」とおぼへがきして、ふんで（筆）をとめぬ。

つまり、作者は四十歳前後の時、わが子が重病にかかって医者たちからも見放される状態だったのを、富士の浅間神社に祈願して病は平癒した。その際、その子が十五歳になった年にお礼参りとして登山すること

を誓った。子どもがその十五歳になり、自らは五十二歳になった天保十四年、誓いを果たすために富士登山を思い立つのである。

そうなると、子どもを同道しそうなものだが、「勤めが忙しいので」それはできなかったとある。あるいは子どもが十五歳の年ではなく、十五年目の意味かもしれない。

読んでいる限り、作者は従者も伴わず、単身で旅をしている。これほど仔細に旅の様子を描く作者が同行者や従者がいたのに、そのことを記さなかったとは考えにくい。途中からは富士講の仲間と行をともしたり、山にかかってからは信仰の旅という雰囲気も、登山という緊迫感も生じてくるが、出発してからは実には実にのどかな飄々とした風情の旅で、酒を飲みながら道をさがしながら歩いて行く様子は、江戸の近郊旅行によく見られる楽しい霧囲気が横溢している。

出立してまもなく作者は、豊島屋という酒店で持参の瓢に酒を買い、銘柄が「菊」であったことから、「豊島のお菊と道連れ」と浮かれている。

はや東雲つぐる鳥の声ともろ共に門出して、露の匂ひを踏つゝも、鎌倉川岸豊嶋やなる見世にて、もてる瓢へ酒を乞んと、其酒此さけと印を問は「菊こそよき酒也」といへるまゝ、「それよかるべし」と、きく式合を乞ひ腰にして、

ひとり旅と人などがめん其時は豊嶋のお菊是が同行

ところが長いこと、この方面に来ていないため、ほどなく道がわからなくなってしまう。

旭のつと昇り隅田あたりまで一眼にみへ渡りければ、

きり晴や富士と筑波を右ひだり

と口ずさみつゝ、はや市ヶ谷の御門を通り、尾の大侯の御表を過行に、我より先へ旅のよそほひしたる人の行けるあり。久しう此みち行来、せぬ事にありぬれば、「此人富士へや行かん、府中へや行かたなるべし。よき案内や」と、己がこゝろにたくし、付行けるに、程もなく大きな道へいづ。「是、四谷新宿の合ならん」とたどり行けるに、水もる桶（路傍においてある天水桶）の札をみれば、成子町となんあり。「こは行過ぎぬる」と心付、とある酒屋やへ休み、甲街道のみち問ひければ、「こまで来ませぬる事のうたてや。是よりあと、新宿の駅しゆくより、甲陽道へは別なり。されど、むかひなる細道行給へ。すこしのそん（損。ここでは回り道）にて其道へ出ぬるぞ」と、おしへにまかせ酒料やりつゝ立出て、

うかと道の案内と成子まで附行鼻のあひてくやしき

と哥ながら、左の小道へよぎり行は、弓手と妻手の二間道へ出。「左りや行ん、右へや行なん」と、心まどしけるに、左りのあなたより馬士のうた、錫の音もろともに聞へければ心うれしく待よれば、荷に付し馬の四つ五つ埃蹴立て来ぬるに、道の左右を問ければ、「我らと共に来ませ。此頃のてりつゞきに本道は小石の出で馬の沓のたまらず。此道は原野の道にて其そのうれいもなく、日野までは行なり。道の遠近も本道にかわらず。いざ付て来ませ」と心よく教へられて附行けるに、馬のあがきの土埃は煙のごとく立おほひ、汗する顔へ吹かゝり、みへねど左官の手伝とも思わる。遠慮もなくブウ／＼の尻の音は草いきれにまぢりてくさし。

「ア、是道に迷ひぬるが故に此うき事あり。さらば心を改て、たとへ小石の多きとも本道に趣ん」と、こゝろを一決し、其道を問へければ、「む

かひなる十二僧の森を右にみて左りの小道を行給へ。新町へ出なん」と教へにまかせ小道へよぎり、漸（ようよう）この難をのがれけるこそうれしければ、木影に腰こしうちかゝげ、すり火打に煙草くゆらせ咽うるをさんと、腰なる瓢酒、一二はいかたむけ、ふと思ひ出せしは、「老も若きも女には心うばはれぬるものぞ。ましてや傾城（遊女）などのうちにも手くだの多きとしま（年増）には迷ひ安く、己が家業渡世の道をかき、迷ひ出せば家をも身をも捨るものぞかし。ア、我も道にて豊嶋のお菊を同行となしたる因しか、道に迷ひてわづかの苦を引出せり。されど活ぶつならねば早く本道へ心付しこそ幸有」と、

道連と思ひし酒は敵なりいざやかたきを吞尽さばや

と、口ずさみつゝ、傾（かたむけ）吞ければ一瓢空しく成けるぞ哀れなり。

適当に前を行く人について行つて道をまちがえ、馬子に従つて行くと埃や臭氣に悩まされ、ようやく本道へ出て持参の酒を飲みほす。この部分、名所旧跡が出るわけでもなく、特筆すべき資料となるような記事もないが、ややふざけすぎる趣もあるとは言え、当時の旅の気分や実態がつかめるといふ点では近世紀行の中でも有数の描写であろう。ここに見るような軽妙な筆致や細かく具体的な描写は最後まで変わらないが、中盤から後半にかけてはやや記事は簡略になってくるため、これほどゆつたりとした調子を最も味わえるのはこの冒頭だけといってよい。旅に限らず、当時の生活や社会の余裕と平穩がよく伝わってくる部分である。

三 およその旅程

ここでおおまかに、この旅の行程を見ておこう。

出発したのは十日で、府中の六所権現に参詣し、玉川を越え、八王子を経て、駒木野に泊る。十一日は駒木野の関を通過し、飯縄大権現に参詣する。依瀬の宿で富士参詣の五人と道連れになり、彼らとともに甲州道中（甲州街道）を進んで、野田尻、鳥沢を経て猿橋に着く。その夜酒を飲みながら交流し、翌十二日は岩殿山の古戦場を見物し、田野倉では連れと一時別行動をとって、旧友と二十四年ぶりに再会して語り合う。ようよう吉田に到着し、一泊し、翌十三日の早朝から浅間神社参詣、胎内くぐりをすませて登山にかかる。

板 坂 耀 子
五合目の茶屋で、武士の二人連れから先達をしてくれと頼まれ、以後は彼らと同行する。夜に入って八合目に着くが、二人の武士は体調を崩したので小屋に残して作者は他の人々とともに頂上に上り、日の出を拝する。下山後、また先の五人と連れ立つが、竹の下宿の前で名残を惜しみつつ別れる。

一方で下山の途中からまた例の武士二人と、その知人萩原新之丞という人物としばしば行動をとるようになり、彼らとともに御殿場から蓑毛に向かう。途中で彼らを先に行かせ、また一人旅となったため、蓑毛では宿を取れず、密正院という寺に泊めてもらう。

翌十六日は雨降山大山寺に参詣し、荻野を過ぎて田名に泊る。十七日に拝島川を渡って日光街道に出、箱根ヶ崎に泊り、十八日、川越を通して江戸に帰着する。

四 富士講の実態

紀行を歴史的資料としてのみ評価することには抵抗を感じるのだが、それでも、この作品の一つの価値は、当時の庶民が富士参詣の折に利用していて「富士講」の実態が細かい部分までよくわかることだろう。

富士講は、富士山浅間神社の信者たちの組織で、中世から始まり江戸時代に非常な隆盛を見た。この紀行の作者が歩いた甲州街道は、この富士講を始めとする信者たちが多く往来する道だったことは、中西慶爾氏「甲州街道」（木耳社）にも詳しい。

他の街道と同じように、この街道の旅人の群れは種種雑多であったが、その中で、関東や東北の各地からやってくる富士山登拝道者が相当の比重を占めていたことは注目される。彼等はあきないの閑散時や農閑期を利用しての旅で、大月から分れる富士道中や、甲府から岐れる身延街道を、白衣に身を清めて、鉦を打ち鳴らしながら、晴れやかに群れて行ったが、何しろ、故郷を離れて解き放たれた自由感に天にものぼるような気分で、しかも多数の団体旅行ときているから、しぜん気持も大きくなり、ついつい粗暴の行為も多くなった。これが帰途につくと一層ひどくなり、まるであばれることを本領と心得て、暴民化するような場合もなくはなかった。特に富士講道者がひどい。これが甲州街道を荒廃させ、斜陽化させる原因となったことは否めない。（序章 甲州街道の相貌」中、「甲州街道の乱脈」）

と、中西氏は指摘され、「五街道取締書物類寄」（「近世交通史料集」所収）の文政六年の道中奉行の文書を引いて、「富士参詣に罷越候者」の処

置に配慮している様子を指摘しておられる。

「富士の道の記」の記述からは、そのような乱脈ぶりはうかがえず、むしろ後述するような旅慣れた庶民たちの姿が浮かび上がる。ただ、このような富士信仰が伊勢参りと同様に、宗教心は口実にすぎず、娯樂的要素が多く、団体としての縛りもかなり融通がきくものであったことはわかる。もっとも、現代でもそうであるように、参詣旅行の宗教性と娯樂性は切り離し難く結びついていて、あなたがち信仰が口実とも決めつけられないことも、これらの記述からは伝わる。

この紀行で最初に富士講の集団が登場するのは、作者が小仏峠で立ち寄った茶店で会った、既に富士参詣を終えて帰途につく一行で、指導者らしい人物が富士山の神体について周囲に講釈している場面である。これが事実か、富士登山を前にして作者が読者に予備知識を与えるために設けた虚構かの判断は難しい。この作者なら、その程度の創作は行いそうでもある。「こんな長話を聞いても」と立ち去るあたりもやや不自然である。しかし、虚構がまじっていても、このような一行や指導者が実際にこの街道では散見された可能性は高い。

(25) 「しばし足を休めん」と茶家に立より茶などふくしてありけるに、はや富士の登山終りて帰かへれる同者五六人も此茶店に休み居たり。草咄してある其中に、先達とおぼしき人油扇子を笏にとり、或は開きて風を乞て咄すを聞ば、「夫（それ）富士山はいにしへの事はしらねども、元禄の年次、甲陽吉田口を道ひらきせし食行身禄といへるは、勢州一志郡清水村の産にして富めるものなりけるが、行者となりて家を出、十七歳より御山へ登山なし其外諸国諸山をへめぐり、果は江戸山手に借家して妻もありて女子三人ありとかや。四十五ヶ年の登山終つて六十三歳の時、

『中なる娘は其器にあたる行者也』と、行法並書るものどもを譲り教へて登山なし、三十一日の断食し七合五勺目に入定あられしとかや。今烏帽子岩にてなり。夫よりして北口登山の同行多く吉田の繁栄いちぢるし。又此食行の教へに、富士山は神佛両部にて死服の穢れ魚肉の穢れをいとわずとも、心にも諸の穢れなければ登山して、其ねぎ事の叶はぬはなし」など、実か否かわ（は）しらねど、鼻うごめかして語り居けるを、かたわらにてこゝかしこ聞、「長物語きかんと道行邪魔」と立いでつ。

やがて依瀬の宿にかかると、宿には寺社の手水場にかかっているように、各講の印を染めた手拭が、軒先や竹にびっしりと結びつけられて風にはためいている。その講中の宿泊はこの家だという目印なのであろう。

はや依瀬の宿へいづ。此駅は馬継ぎにはあらねども、家々も行儀よく並て作り商家も多く又多きなる旅屋も四五軒あり。中頃角屋といへるなどは講中又は同行の思ひくの印を付神社仏閣の水屋に掛りしごとくの手拭ひをも、筋千筋を軒にさげ、或は竹幾本となきに是を結付ひらく風にひるがへりて賑はしくかざり立、外には女の出で「飯めせ、休給え」と呼立つれど、

まもなく、桂川を舟で渡る時、五人の富士講の一団と知り合う。その少し前に道連れになっていた商人と、あわせて六人と作者はしばらく行動をともにしている。

かつらなる其つ文字かわ（は）しらねども弓とつらなる近道を来てと言いつゝ舟をわたり、此乗合先の商人と又下野佐野辺のものなるよ

し五人連にて富士参詣のものにして、我もよき同行と思ひ、咄し合、渡しを上り崖に添、弓手に流れをみて行ば、ほどなく吉野へいづ。

猿橋宿で、連れの五人と自分との講はいずれも同じ宿が定宿だったため、そこに泊まる。その夜彼らは酒宴で親交を深める。作者の講の先達は同行しておらず、作者は単独で行動していると見てよいだろう。

五人の人たちの指導者は安左衛門と名乗る。一座の交流をはかる様子はなかなか手慣れていて、その地位にあるのもうなずける。やや長文だが、富士講の信者たちの宿泊の様子がよくわかるので引用しておこう。

板 坂 耀 子

猿橋宿の本陣は五人の連れの名ざしの宿、又我講の先達も此家定宿なれば、六人うち連れどやくと、一夜の宿りを頼ければ、あるじもかも外に出て、早起遅き暑き涼しき礼なして、茶、たばこぼん、すゝぎ湯、出れば支度取捨て足洗ば「いざ是へ」とかの手引に先に泊りし人々を押のけつ、床の間付たる十畳の奥の一間へ通りける間なくも、「風呂のあきしぞ」といふに、皆みなく湯入りなど支度しは横雲されて照る月は山くゝの木の間より居間の央（なかば）へさす影に「畳の上に松の影」の晋子（其角）の名句も思いやられ、「此月むざく詠めんや」といへば連れる五人も「さこそや」と柏手ならして酒肴をたのみける間に、

さる橋の樹々のこづへや月の宿

と詠やるうちに、「はやあつらへの出来しぞ」と持出す酒と肴をば真中になし六人車の座を造り吞つゝも、我より心うちとけて故郷や今の住居やら、身のさち不幸せわたりさへ包みもやらず語らひば、其中に同者の長とも思われて四十をみつよつ越ぬらんが、膝を直して「我らは下毛都賀郡佐野のあたりの古橋村安左衛門といへるもの、又夫なるはだれ、

彼は誰だれ」とみなく、姓名呼なして、互に礼をなし、又安左右衛門の乗出て、「是迄五七里の同行にみこゝろの底さへもしらざりし故、みづくさくへだつる心はあらねども奥歯にものゝはさまりしやうにて、さぞやう（憂）しともおぼすらん」と身さへ心もへりつゝいへば、我も又「一人りの旅の哀さへ道くゝのうさ、たいくつを咄んと行人くゝと語らえばごまのはへかとうたがへもやうけつらんと、夫（それ）かれと遠慮ごゝろのいで来て、はしなくもいひよらづ。ふしぎのいにし（縁）でかくありつゝ語ふは此酒にぞあらんず」と車に廻して逆におさへ、二はいかさねや、合や、など四方の咄しを肴にして吞あかせば、ことく舟こぐ人もあり、徳利さへはや横にならんとするゆへに、「又あすこそ」と約しつゝ、納めければ「夕飯めせ」と勝手より膳の出ば、みなさしつどへて喰終り、蚊屋と寝ござを持出し、そのもふけをなし、六人もろとも一ツ蚊屋心の底のへだてさへなく、虫の音をうつくと一睡の夢を結びける。

そしていよいよ、富士参詣の拠点ともいうべき吉田宿に到着する。この部分を読めばわかるように、作者は連れになった五人と別に宿泊するのが淋しいため、自分の富士講の定宿を変更して、彼らと同じ宿屋に泊まっている。

彼らの到着は遅かったので、胎内くぐりも明日にすることにしたが、宿に荷物を預けて登山して、今下山してくる別の一行の姿もある。そして作者たちが宴会をしている所に宿の手代がやってきて、明日の手配をさまざまに打ち合わせる様子も、当時の現地の参詣客の便をはかる機構がきわめて整っていたことをうかがわせる。

田畑交りの野中を行、下吉田村。爰は何れも農民にて、そここゝ家も

まばらに建ち子どもの多くつどへ来て、「びつきまけ／＼錢まけ」と登り行同者につきくるをみて、

二階なき吉田の里に錢まけと尾花がもとにまねく子供ら

といへつゝ左へよぎり、直に行は吉田の入口に番屋の有て登り来る人々の国と郡と名所を帳にも付ず改る。木戸を通れば大鳥居、「富士山大権現」の額は新田源道純公の御筆也。此鳥居の前にひざおり（折り）て鈴ふりならして御歌を上る同者あり、又直さまに行も有。是より御師商家軒をならべて賑しく、登り来る同者あれば、登山過て帰る同行ありて、其鈴の音かしましく、我講の御師は仙元坊なれど、一人り別ならん事の本意なくて佐野の五人らが御師外川能登守へ行んと約しつゝ、東側にて中程ほどの外川の家へ馬もろ共七ツ下りに着にける。最早御胎内へはおそかるべし。足すゝぎ給へ」と持出すたらいの水のひやくと、あつき茶もろともくみ出せば、支度取捨すて上段の次の間へ案内にまかせ通りければ、「はや湯も出来て有なれば勝手にめさせ候へ」と案内は言い、捨て過にける。「さらば湯に入らん」と一人づゝかわりぐゝに入支度ば、我らより先へ着たる同者十四五人、笠の印は念つゝみも笠も預置、御胎内へ参りて、どや／＼と帰来る。是は上総の木更津辺の者なるよし。夫より御師のまかり出て暑き冷しき道中の安否登山の気どく（奇特）など礼をなし、「何もなしとも神酒一つ進まいらせん」と吸物三つもの取りまぜて広ぶたにのせ差出し、「ゆるりと勝手にめさせよ」と立行後にてはじめつゝ、さへおさへつゝ、或時はぐる／＼廻し逆戻し、肴はてんでに勝手箸、吞や喰へやと友じいに面にあからむものもあり、痰にせかるゝ人もあり、ほく／＼居眠るものもありて、はや酒もたけなわになりけるころ、手代の来りて「よろしくめせ」と礼なしつゝ「ちとおあい」など取り持つに、「もはや十分おつもり」といふうちに安左（先の一行の指導者安左衛

門）と我と礼しつゝ、「あすは御胎内より御山を掛け越し、須走へ下りたし。御札も今宵頂て強力賃や山料まで御勘定頼みたし。又御馬帰しまでは馬かりて登りつらんと思ひぬれば、是もやとへて給われよ」。其外くさ／＼の事ども打明て、「あすは未明に立いでたし。何卒御世話頼むぞ」と得て勝手なる頼みをも、「承知」と吞込む手代へ盃納おさむれば、続て持出す膳おしき、喰事仕舞いは強力案内も共に二役の「明日の御供は私なり。何卒御頼申ぞ」と引替、御師は御札を持出し、夫々望みの札買終り、又しばしして「夫々の御勘定はかくの通」と手代の持出す書付は、

一、百廿二文御山役料 一、九十式文 綿入損料 一、百文 御持弁当 一八十文 上下わらし四足 一、八十文 強力わり合 十疋人前 四百九十文

といへる所へ、一人毎に金貳朱づゝ出し残りは「余り少しなれども坊入也」と手代に渡せば、御師の出で坊入の札をのべ、「はや寝まり候へ」と蚊帳つり寝ござふとんまで持出す合図にほつ／＼降り来る小雨は、「今日午の七刻土用の明し印にもやあらん冷しさや」と不二の御山を枕とし能き夢みんと、みなもろ共に寝まりけり。

翌朝、いよいよ登山である。ところが、五合目の茶屋に着いた時、二人連れの武士から案内役を頼まれる。作者は「まだ二度目だから」と言いつつ、これを承諾している。周囲の人々もこれを勧めているので、さほど無謀なことでもなかったのだろうか。

作者はこれ以後はこの二人と共に登山する。八合目の小屋で二人の気分が悪くなったので（高山病か）頂上には一人で登っているが、帰途に

は二人も無事に登ったという知らせを聞いて安心してゐる。といつても、さほど責任を感じたりしている様子はなく、きわめて淡々とした記述である。

五合目の茶屋にこそ着きにける。「此所は是御山の半腹にて麓立の登山の人々は中喰（昼飯）の場なりければ休らへ給ひ」と案内のいふにまかせて、わらじのまゝ安座しつゝ汗ふきいきつぎながら茶など吞て有ければ、御師に同宿の念の同行も爰に休めり。早き遅きの礼をのべ、又此茶屋にも酒あれどもて来し瓢の焼酎に山氣を拂ひて居けるに、かたわらに武士の二人休らひ居て五合徳利を差向きにてとりやかして吞居しが、「先達、合（同行）を頼みまし」と猪口を我へさしければ、「こわありがたし」といただきて一猪口のべば重ね合い三度四たびのおさへのと、五合徳利をころりとなせば、我らが瓢の軽くなぬぞたのもしけり。彼二人なる案内の「いざ飯めせ」と盛出せば、我案内もそのごとくもり出しぬる。昼飯をかくくして喰し終れば二人の連し強力の言やう、「我は此御二人の案内して小御嶽山へまわるべきなれど、重荷を背負廻らんも其その役なればいとわねど、先達のともなひ給へば我が行しよりましならん。左あれば我も足の労少しく助かるすべもあり」といふに、我らが連たりし案内のものまで口そひて「先達、其意に任せ給へ。我と此ものと此荷を背負ひすぐに登りて六合目に待てあらん」と「頼むく」といひければ、吞合ふたりし二人の武士さへ共く、「先達連て廻りて給へ」と余儀もなくなったのまれて「こわことくしき仰あふせごと、我先達にあらざれど行きやう衣の様体、なりふりは夫（それ）とも思ひ給われど、こたびで二度の登山にて御山わけも、不案内。されども初山にあらざれば、少く案内もしてあり。又先程ほどのくみ給へる酒の御恩も多性のいにし

（縁）、しるとしらぬをゆるし給はゞ行衣の御判をかたに着て先達をやいたさん」と、

先達にあらねど夫と頼まれて吞込んで行五合目の酒

といへければ、みなく^わと笑へけり。

下山後少しの間は、先の安左衛門の仲間と同行するが、竹の下の手前で別れており、その後はまた、先の武士たちと連れになっている。

「こ宵の宿りいかに」と問へば安左子（安左衛門）のいふ、「まだ申の時ばかりなれば竹の下までは行なん。なれども我同行に道の弱きと少しく病めるものあれば、爰に泊らん」といふ。我は又今宵竹の下に宿り明日最乗寺かけて養毛泊りとなし、石尊の御山を朝かけに登り来光谷に昇旭を拝したし。さすれば先の道順（それからの旅行の予定）もよし」といへば、安左子の答で「一人にしあれば其意にまかせぬこそよけれど、又元々の同行の意にてそむくも本意なし。又いつまでもそこ（あな）と同行もなりがたし。我等は爰に泊らん。残りはおしけれど、その足を止るも心苦しければ爰にて別れん。さらば一ぱい盛りなん」と酒を乞ひとりて六人してのみつゝ、是まで長くの同行まで世話しせわにもなりたりし礼を互へに言いゝわれつして、又足の痛めるものに膏藥などあたへみよ（三夜）さの泊りは枕を同じうし、三度の飯の箸さへも、ともくにとり合旅は道連れ世のうさも物語られつ語りしが、又いつまでももる共にあらんにもあらざれば、はや別れつらんと、

別れ行つばめ淋しや秋の夕

この紀行で作者と行をとにするのは、安左子の一行五人と、連れに

なる武士二人と萩原新之丞との三人の二集団である。紙幅の都合で省くが、彼ら三人との交流も細かく書かれ、先の五人の場合とともに、このような旅で見知らぬどうしがどのように連れになり、また別行動をとるかがよくわかる。そしてその様子は実につかずはなれず、程よく合理的である。

江戸時代の紀行を読んでいると、同行者の体力や好みに縛られて、自分の行動が制限されている場合が非常に多い。明確に不満を記している作者もあれば、漠然とそれがうかがわれる場合もあってさまざまなが、主従の場合でさえ、そのような軋轢が生じている場合が少なからず存在する。ところが、この「富士の道の記」の作者の場合、そういう様子がまったくない。実に自然に無理なく、どちらの一行とも別れたり行動をともしたりして、互いに負担を与えていないのが印象的である。

作者の個性や人柄もあるのだろう。しかし読んでみると、安左子の一行にせよ新之丞一行にせよ、相手方も同様に合理的で的確な判断をしているようである。あるいはこれは、江戸の庶民たちが富士講という形式の団体旅行を数多く繰り返すことによって蓄積してきた、旅の知恵ともいふべきものが存在していたと見るべきなのかもしれない。彼らの行動や発言を見ていると、今日の私たちにも真似ができないほど、その交流のしかたは親密でいながら無駄なく洗練されている。

五 街道の隆盛

中西氏も指摘される甲州街道の繁栄を始め、この紀行を読んでいると、庶民たちも含めた多くの人の富士参詣と支えあって、周囲の宿屋や茶屋、あるいは街道沿いの町々が活気に満ちていたことがよく伝わってくる。

作者の時にやや滑りすぎる程の筆は、そのような町や人々の姿を明確に描き出している。すべてを紹介するのは紙幅に限りがあって許されないが、いくつかをあげておきたい。

随筆や評論の類にはしばしば欧米と日本の文化を比較して、「日本人は人工のものには美を見出さない」「風景をあつかった美術にも、外国では人間が登場するが日本のそれには人間が描かれない」などと述べるものがあるが、少なくとも江戸時代にはそれはあてはまらない。名所図会等の美景には、人がひしめきあうものが多く、人間の雑踏や町の賑わいが当時の人々には美しいと感じられていたのがよくわかる。この紀行にもそれが表れていて、作者は富士山頂の日の出、下界を俯瞰した眺望など、自然そのものにも熱心な視線を注ぐ一方で、旅の同行者や土地の人々など人間臭い世界にも飽くなき親しみ、好奇心を寄せて細かく観察し、記しとどめている。

たとえば茶屋の描写を見よう。最初に茶屋が登場する高井戸の場面では、特に茶を持って来た娘の描写が異様に詳しい。

しきりにのんどのかわきけるまゝ、「水乞ん」と高くもあらぬ日覆せし茶店に腰うちかくれば、あるじのぼゞのあいそよく暑き冷しき取まぜていや（あいさつ）をなし「夫（それ）煙草の火、茶々にあげませし」、いゝやればむすめは「アゝ」とこたへつゝ、もて来る茶さへ古花の「是ではゆかぬ」と水こへければ、手桶柄杓ももろ共に持出たるは、我を馬共ともおもはゞ思ひと、柄杓のまゝに吞終り、さすがは玉川の御上水、其味誠に美々しけれ。又此茶店の娘、年ははたちの上三つ四つも越ぬらん。昨日あたりのあらひ髪取上もせず、其艶は赤きとにはあらねども黒羽二

重への七ツ下り、やうかんの色あへにて、ちゞれて長くもあらず、ふとりし事は立曰のごとく、杓丈の帯はふたへ廻して結ぶ事をしらず。高井戸に生れながら身のひくき事、袋棚のものは己して、生涯取事を得せまじ。くゞり戸を入には天窓(あたま)の用心更になし。歩行(あゆ)ばんよりは、いねてころげたらんがはるか早かるべしと思わる。鼻は穴(そら)を向ひて二階にて、紙のくすばる匂ひは早く知れど、尿などふみたる匂ひは更にするべからず。元よりちいさければ、額と頬の高きに覆はれて横さまよりみれば無きかと思ふ。痘あとかくさんために白粉を粧ひども、下地うつりて、さながらぬりたての壁色也。されどたゞれ眼の瞳子うごかして横をにらまへるは色氣のなきにしもあらず。

高井戸の娘か鼻と身はひくしされども高い額煩づら

板 坂 耀 子

なお作者の女性の描写は執拗に辛辣で、小原の宿でも客をよびとめる女を次のように楽しげに描いている。今日の目で見ると抵抗があるかもしれないし、安易に愛情をこめた悪口とたたづけるわけにも行くまいが、それなりに名文ではある。

此宿、人馬の継馬なれども商家は多くもなく、農家機家も交り旅屋めきたる家より女の出で、「昼飯めせよ、休み給え」とよびたつる。其女をみおれば、病のやうく此頃愈つらん、瘦身めんぶ(面部)やつれし事は、御山にさける女郎花の茎のごとく、丈の高き事おびたゞしく、鴨居は腰かゞめねばゆきかひ出来ず、火の見矢櫓の半鐘は立ながら打もとりもするらん。眼くぼやうにして玉大きくすこし。鼻は狗の鼻とにはあらねども俳優松本の鼻に増るともおさくをとるまじ。首はぬけ出て鰓(あぎと)と骸(から)のあひ、尺もありなん、「ろくろにや」とあやぶみ、

腰は柳のごとく細くしけれど生るゆう靈かときみわるく、「都の八瀬小原の女は薪など首(かしら)のうえにいたゞき京へ往かへして日々是をひさへて業とするゆへ、自然に猪首なりとかや。こも小原の宿なれば其業させなばよき首のいできなんや」と世話にもならぬ物おもひはやくたいなし。「爰に此女ありて高井戸にひくき女あり。二人杓ツになし程よく作りたらんには、二人りながら世になき美女たらん」と思ひど、天地の靈物、何ぞ其自由を得んやと、

下り来てはつとためいきつくくし小原の里にやせしたをやめ

宿屋の描写の詳しさは先にあげた吉田の宿の描写でもうかがえるが、その宿をとりまく町や地域の様子も作者は的確に描いている。先の背の高い女性がいた小原の宿の付近の様子は、

此あたりまでは、茅薄のそば山にて、三四尺をかぎり立木もなく遠きより望ば青くとして芝草のみと見ゆらん。はや小一里下りなん立る樹々もあり、谷より湧出る水を笕もて水の力をかりて車をかけ米つき麦つき小麦つきなど引せなどする。家は山の半腹あぶなげに作りてあり。賤がふせ家はこゝかしこまだらにみへ畑は凸凹ながら境目くは桑を植て蚕の助となし、又行先を望ば小原の宿もみへわたり又も向かいに白じろとみゆるは街道、馬入川の上ざまならん。此あたり谷の川水其あたりにて落合ならん。こゝの森かしこの樹々にせみのつくつくほうしと鳴立るは初秋の心をつけて冷し。かれや是やとみるうちに早くも小原の駅へ下り着。

と、実に的確に観察し効果的に記述していて、田園風景が鮮やかに浮

かび上がる。一方で賑わう町の描写も巧みで、

ほどなく上野原に着。是、甲陽郡内領の名付にて人馬継なり。駅からもよく富商軒をならべて栄へ、けふは此市の日にしてよりつどへる商人は諸方の産物、土地の産を交易して賑はし。又おかしげに小うたうたへおどりして飴うるあれば、老も若きも其面白さにほだされて用なき飴買ふものもあり、あるはまた黒き白き赤き筋すじある布を日覆して後には熊膽丸と大文字に染ぬき、熊の毛皮に安座し索子(さじ)にて此丸薬をよりながら其効能の言立(いへたて)は水の流るゝごとく、いかなる病も此薬に敵することあとふまじ。是や神農耆婆扁鵲の再霊かと、賤の老若男女にかぎらず立つどへ実〳〵として求る有、又言立のおかしきに笑して聞居るものもあり。我等もしばし立聞て、

上野原の市場にひさぐ売薬の背腹下腹愈す口先

また馬方や船頭との交渉も具体的に細かい。

「いざや行ん」ともろ共に立出、宿のはづれに馬士の居て「吉田まで帰り馬、かり給へ」といふ。「かへり馬なら安かるべし」と値段を聞けば式百文では「高し。まけつや」といへば、「馬士さへ馬までも女にて乗心もよかるべし。ねぎる所はあるまじ」と断りがましくいへるければ、「さなればみな〳〵一連れに乗つどへん。六匹あるか」と問へければ、「六ツにはひとつのたらずして五匹ならではなし」といふ。馬たらねば「大津駅の子供の鬼事するやうに籤して一人り歩行はいかゞぞ」といふを、我と安左子とおとなびて「二人りひとつをかり受て道の半に乗りかへん」と相談きまれば四人りと我と五人り乗揃へてぞあゆませける。

この作者の場合、このようなやりとりや相談を「事実だからともかく何でも書いておこう」と言った記録魔のような性格で書きつけているうには思えない。江戸時代の紀行の中にはしばしばそのような、すべてを書きつける詳細なものもあり、その中から興味を引く記事を読み取り採取するのは、むしろ読む私たちの感覚にまかせられる。

ところが、この作者の場合、先ほどのような田園や町の描写の際の、実に効果的な描く対象の選択から言っても、何でも書きつけたという感じではない。このような馬の乗り方の細かな交渉を、読者も読んで楽しろう、文学としての完成度も高まろうという本能的な配慮が明らかになされていると思う。

江戸時代の紀行には、実際の旅の案内書として有効であるべきであるという意識が、かなり文学的な姿勢のものでも切り離し難く存在しており、このような記事はそういう実用的なものとして記されることも多かった。だが、これも微妙なところで判断が難しいが、実用に供するという目的で記しているようにには思えない。やはり文学的な効果を計算しての記述ではないかと思えてならない。

他にも、全編の圧巻である富士登山の様子、山頂からの風景の描写、あるいは「おくのほそ道」もやや意識しているかと思える、旧友との二十四年ぶりの再会場面、古戦場観光の際の考察、簡単な記述だが囚人籠に出会ったという記事、拜島川を泳いで渡り関所役人に捕まった人の記事(註2)など、あげていけばきりが無い。実に多種多様な話が全体の構成を損なうことなく、それぞれ巧みに語られている。

これは、江戸時代の紀行の優れた到達点を示す傑作であると言ってい

い。そして、これほどの作品が、特に注目もされることなくただ一冊の本として「国書総目録」にも収録されていないことは、この分野の作品に、今後ますます優れたものが発掘される可能性もきわめて高いといふべきであろう。

註

- 1 「国書総目録」の書名等から推測。なお拙稿「山の紀行」(語文研究六三号)を参照されたい。
- 2 この川の渡しは関所になっていた。

(二〇〇四年九月一〇日)